

強力な台風北に厚い雨雲

勢力衰えず 地形も影響か

北上しても雨の勢いが衰えず、広い範囲に記録的な大雨を降らせた台風19号。河川の氾濫が相次ぎ、大規模な浸水などの被害が各地で多発したのは、台風規模に、風を受ける山がある地形条件が重なったためとみられる。東北などでは、想定を超える事態への対応に追われた。

台風19号が伊豆半島に上陸したのは12日午後7時前。だが、台風本体の北側には厚い雨雲が張り出し、東海や関東地方では上陸前の日中から大雨に見舞われた。12日に24時間降水量の観測記録を更新した地点は16都県の84カ所に及んだ。雨が強まる時間が遅かった岩手県でも、13日までの24時間雨量を更新した地点があった。13都県で大雨特別警報が出され、東北から関東甲信にわたる広い範囲で河川が氾濫したり、土砂災害が起きたりした。

広範囲に大雨を降らせた要因について、専門家は台風本体の大きさや勢力に、地形条件が重なったことを挙げる。

台風19号は、今月6日に中心気圧千〇パスカルで発主。その後、急速に気圧が

な「強さの915パスカルに。平年より1〜2度高い海面水温によってその後

も勢力は大きく衰えず、本州の半分ほどをすっぽり覆う大きさで上陸したため、

広範囲で大きな被害につながったとみられる。横浜国立大の筆保弘徳准

教授(気象学)は、「特殊な雨台風」と表現する。この時期の台風は、近づく前から秋雨前線を刺激し、2、3日前から雨をもたらすことが多い。これに対し19号は、台風本体の雲が1日で一気に大雨をもたらしたのが特徴だという。このため、あふれるほどの水が川に流れ込んだとみられる。地形が大雨に拍車をかけた。山口大の山本晴彦教授(環境防災学)は「進路沿

後、強

時刻時刻

で



台風19号により一帯が水没した宮城県丸森町。中央は阿武隈川(左奥が上流) 3.3千メートル、本土へ

「バックウォーター現象」の可

13日午後、本社へりから災害に詳しい安田進・東京電機大名誉教授(地盤工学)が、関東平野の各地で氾濫した河川の状況を見て回った。

浸水で多くの利用者が一時孤立した特別養護老人ホームがある埼玉県川越市では、荒川水系の越辺川の堤防が決壊しているのが見えた。確認できたのはカーブの出口で、安田さんは水が勢いよくぶつかり、堤を削ったのではないかと話した。

上空から専門家分析

栃木県佐野市では利根川水系の秋山川が決壊。「堤防が低く、水位が上がると決壊しやすい」との見方を示す一方、流れは比較的直線で詳しい原因調査が待たれると述べた。

安田さんは、より多くの水を集め、流域面積が広い大河川やその支流が各地で氾濫したことを挙げ、「19号が広範囲に記録的な雨を降らせたことが改めて浮かび上がったと語った。一方、荒川の調整池である彩湖や、利

備えたが想定超